

2007年10月16日

14:49

弥生時代・弥生文化とは？

今日もガイドラインについてかなあ・・・

- よく使われる説明

「日本（もしくは日本列島）において、水田稲作による食糧生産が始まり、前方後円墳が出現するまでの時代」

これを先生はあまり正しいとは思っていない。

ただし、アブリオリに日本・日本列島という地域を設定することに問題がある。

考古学でとらえる文化もその当時の人々の生活の仕方とかでとらえるべきで、まず最初に日本列島とかで区切ってはいけないということ。これは結構大きな問題になる。なぜかという、昔の文化に関しては、それぞれ人々の生活のあり方を分析して分けなければいけないのだが、最初から分けてしまうと、弥生文化がそのまま日本の歴史に繋がってしまうことになったり、あまり良いことではない。

- 水田稲作の技術は縄文時代に遡るか？

断言はできない状態にある。

その可能性を示す資料が見つかり始めている。レプリカ・SEM法による分析事例の蓄積。

この分析方法というのは、米が埋まっていたという穴にシリコンゴムを流し込み、レプリカを作る（レプリカ法）。そして顕微鏡で、細かいところを観察し、その土器の時代に米があったとかを調べるのである。今はどんどん研究が進んでいて、ここ数年、いくつかお米と断定して良いのではないかというものが見つかり始めている。お米を食べる害虫の跡も見つかっていることも見逃せない。

ただし、不確かな資料も多いので注意が必要。

縄文時代にお米があったということが判明したということが10数年前にいわれた。そこで色々な調査が進んでいたのだが、全部論拠が崩れてしまった。証拠がダメになってしまったので。縄文時代後期の祖期に米の圧痕が見つかったということで話題になったのだが、実は弥生土器だったということで、また白紙へ。はじめは欠片だったのだが、徐々に全体が見つかるそれは弥生土器だったという例である。

* 仮に水田稲作が行われていたとしても、極めて小規模、一時的なものと考えられる。

なので、遡る可能性はあることはあるが、弥生時代とは大きく性質を異にしているということは覚えておくべき。

- この講義での説明

「晩期縄文文化を基盤とし、そこに朝鮮半島南部経由で伝わった灌漑型水田稲作の技術とそれをめぐる生活のあり方が浸透したことで変容した考古学的文化。前方後円墳の出現以降を古墳文化とする。」

時代ごとの境はとても大きなもののように見えるが、人の生活は連続しているので、徐々に変化してゆくのだということ。

「弥生文化」の時代を「弥生時代」と理解する。

同じく晩期縄文文化を基盤としながら、灌漑型水田稲作などが定着しなかった地域の文化を「続縄文文化」という。

- 縄文文化の範囲について

- * 縄文土器の系統

縄文土器とは、縄の模様がある土器ではない。世界的にはそんなものはいくつもあるし、縄文土器にはないものもたくさんある。じゃあなんなのか、それには系統というのがある。撚糸文土器（縄目なし）とか黒浜式土器（縄目あるが、巧妙な作り）、馬高式土器（スゲー巧妙な作り！）、長野県だと曾利遺跡出土土器（これも縄目なし）、曾利式土器、大洞A式土器、とかいっぱいあるよね、種類が。

縄文土器は、多様な時期差・地域差を持つが、全体を一つの大きな系統として理解できる。なので、特徴を述べよなんていわれてもできない。じゃあ何で、縄文土器なんてまとめたのか？そこで重要なのが、系統という言葉。最初は一つの作り方があって、後に豊かな地域色が広がっていった。おもしろいのは、隣接する地域は非常によく似た土器であるということだ。一つ注意、生物の系統というのは、一回分かれると再び影響関係の元でお互いの姿が似てくるということはないのだが、土器は似てくるということがあり得るということである。

ただ、そうした土器の系統は弥生時代以降も続く。縄文時代の晩期の土器と弥生時代の土器というのはよく似ている。

→日本列島で展開した一連の土器の系統のうち、狩猟・採集に生活の基礎をおく時期の土器を縄文土器と呼ぶ。

縄文土器を指標とする考古学的文化が縄文文化。

灌漑型水田稲作定着以降：弥生土器・弥生文化

その時期の北海道：続縄文土器・続縄文文化

生活の変化とともに、土器の形も変化しているということを理解しておこう。

灌漑型水田稲作は北海道には定着しないので弥生文化ではない。狩猟・採集に重点を置いているので続縄文文化と言われている。

弥生文化はは、まずはじめに北部九州で成立する。その後、次第に東の地域が弥生文化化していく。

個々で注意してほしいのは、弥生文化は北部九州だけということね。そこから一步出るとそこはまだ縄文文化なのである。

(早期)・前期・中期・後期・(終末期)

3または5期に分けられる。

九州の方から、徐々に弥生文化が東の方に広がってゆくのだが、結構時間がかかっている。グラフにすると階段状になる。範囲をどうするかという話し合いがうまくすすまない。

弥生時代の後期になると東北地方の一部は最終文化に戻る。その部分は縄文文化と呼ぶ。弥生時代早期は九州であって、関東や東北部にはないということには注意ね。

放射性炭素年代測定法の原理

放射性炭素年代測定というような、理化学的測定が行われたことによる。1949年に発見された。これによって、暦のない時代の土器の年代測定が可能になった。炭素の同位体（地球には質量の異なる炭素が3つあるが ^{14}C は地球には一兆分の一しかない。これはとっても不安定な物質なので 5730 ± 40 年で半減する。（改変定数））を測定することで、年代が測定できるようになったのだ。

弥生時代の年代（目安として）

近年の年代観	従来の年代観
早期：前10～8世紀	前5～4世紀
前期：前7～4世紀	前4～2世紀
中期：前3～後1世紀前半	前2～後1世紀前半
後期：後1後半～2世紀	後1後半～2世紀
終末期：後3世紀前半	後3世紀前半

だんだん近年にシフトしてゆくと思われる。

晩期縄文文化には、大きな地域差が存在する。→各地の弥生文化にも、当初から地域差がある。

それぞれの晩期縄文文化を継承した弥生文化が存在するので、弥生文化にも当初から地域差が存在するのである。縄文時代がごつごつ、弥生時代はすっきりという感じの土器の印象を持っていると思うが、実は北部九州の晩期縄文土器の特徴が、このようなすっきりした作りなのである。このような装飾の少ない土器が元になっているので、結果として広がった弥生土器というのはすっきりしたもののなのである。それだけではなく、北部九州に水田稲作を伝えた朝鮮半島に存在していた無紋土器とこの晩期縄文文化の土器は共通してすっきりしているということも興味深いことだ。東日本の縄文時代晩期の土器は結構装飾的であったとことが最近わかっている。青森県砂沢遺跡の弥生時代前期の土器は、すっきりしていなく、装飾が華やかである。その背景にはその地域の晩期縄文文化がそのような土器の作り方をしていたということを反映しているということだ。なので弥生土器と縄文土器の区別も、そんなにはっきりしているものではないということを覚えておいてほしい。

その後の文化や社会の変化にも大きな地域差がある。そのあり方をここでは大きく二つに分ける。

* 人口が増加し、複雑な社会を形成し始める。→「西部弥生文化」呼んでおく。

これについては、大陸的な要素がたくさん入っていることから、大陸的弥生文化と呼ぶこともあ

る。

* 人口増加、社会の複雑化がそれほど顕著ではない。→「東部弥生文化」と呼んでおく。

弥生時代のある点を境に、東日本と西日本の人口密度が逆転。